

審査用コメント

グローバル化の進展が一層激しくなっている昨今の社会では、英語教育の重要性が日増しに高まっている。その流れの中で、日本全体の英語教育の方向性として、英語は英語で教えるべきであるという考えが文部科学省より提唱され、高等学校だけでなく、中学校にも及んでいる。この指針の妥当性については賛否両論あるものの、英語のみを用いて教えることのメリット、あるいは日本語が関わることのプラスやマイナスについて、実は何らの検証もなされていない。松本論文は、日本の英語教育において学習者の母語である日本語と目標言語である英語がどのように関わって英語教育がなされうるのかを、実証的に研究し、その上で、今後の英語教育における学習者の母語と目標言語との関わりの望ましいモデルを提案している。

主に 20 世紀初頭から始まる学校教育における現代語の教授において、その主流となる考えは、**Direct Method** に代表される、目標言語はその言語で教えることが基本であった。従来、英語教育のゴールとしては、英語を母語として話す人びとのように話せるようになること、があった。しかし、近年見られる英語使用の在り方の変容として、何らかの母語を持っていて英語を駆使する人びとが英語話者の多数を占めるようになり、英語教育は、学習者の中に二言語あるいは複数言語が共存するモデルを考える必要性に迫られてきている。これについては、**Jim Cummins** の **iceberg theory**、すなわち複数言語がその基底を共有していることの重要性を言語力として指摘する考えや、母語と第二言語あるいは外国語の能力が一人の学習者の中で相互に影響し合いながら言語力を形成するとする **Vivian Cook** の **multi-competence** の考え方が、先駆的試みとして提唱されている。そこで、松本論文は、日本の英語教育において、学習者はどのように母語と目標言語をとらえ、テキスト読解という具体的な言語処理プロセスにおいて両言語をどのように用いているかの実態を調査し、学習者の持つ背景に合わせて母語と目標言語を適宜用いることの重要性を指摘している。

松本論文では、量的調査と質的調査の統合的アプローチを採用し、5つのリサーチクエスチョンを掲げて、テキスト読解過程で母語と目標言語がどうかかわ

るかを検証した。量的検証としては、第一に、テキスト読解過程に、学習者が母語あるいは目標言語で読解を確認し合うペアワークを挿入したところ、初級者でも中上級者でもペアワークの言語による相違は、サマリーテストには統計的に有意な影響は及ぼさないことが明らかにされた。第二に、ペアワークそのものについては、初級者も中上級者も母語の方が有意に成果を挙げた。第三の検証では、初級者と中上級者では、初級者は目標言語に比べ母語によるペアワークを有意に高く評価したが、中上級者においては、言語の違いについての有意の差は示されなかった。第四のリサーチクエスションでは、ペアワークの使用希望言語を調査したところ、初級者はすべて日本語を希望し、一方中上級者は、母語で作業を行った学習者は母語を希望したが、英語で作業を行った者は、必ずしも母語でなくても良いとした。第五の調査としては、テキスト読解の授業の中の場面での使用希望言語を調べたところ、学習者は文法説明、解答の解説、重要なお知らせなどは母語を、答え合わせや学生への教師の質問は目標言語をかなり明確に望んでいることが明らかにされた。なお、質的調査としては、ペアワークの内容がていねいに報告されており、学習者が母語を用いて議論を深め、その過程で英語を獲得していく様子が克明に描かれている。

以上の検証を基に、松本論文では、初級から中上級へと言語習得が進むにつれて次第に母語のサポートを控え、一方目標言語は次第に増やしていくモデルを提唱している。このモデルでは、上級になれば学習者は使用希望言語について寛容になる、あるいは目標言語を望むこともある事を踏まえながら、特に初級者にとっては母語による理解や作業が目標言語習得に寄与することをしっかりと位置付けている。これは、現在の日本の英語教育が向かっている **English only** の流れに対する重要な指摘であり、十分な検証を伴わない英語教育の指針が出されることへの警鐘を鳴らす役割を果たしていると言える。日本の英語教育が中学校からではなくて、小学校の初級レベルから行われる方向へと向かっていることを考えると、松本論文による検証は、日本の英語教育の行く末にも影響を及ぼしうる可能性を持っていると言える。

なお、松本論文の貢献に加えて指摘すべきこととして、次の課題がある。それは、本研究の検証が読解過程におけるペアワークという言語活動のうちの一つの技能における限られた作業での母語と目標言語の対比に限定されている点である。本論文の検証し得た結果が、4技能の他の領域でも同様に言えるのか、

あるいは、ペアワークとは異なった言語活動を用いた時はどうなるのかなどについては、さらなる研究が必要である。これらの点が明らかにされることによって、はじめて、学習者の中で母語と目標言語がどのように共存し影響し合うかを理解することができるようになると考えられる。

## 審査結果

審査委員会は、本論文が上記の通り、英語教育の重要課題に取り組み、量的調査および質的調査を経て、テキスト読解過程における母語と目標言語の関わりについて検証し、その結果を踏まえて言語習得のモデルを提供している点において、本研究領域における貢献度が極めて高いと判断した。これをもって、申請者に博士（文学）の学位を授与することを全員一致で決定した。

2016年12月4日

論文審査委員	(主査) 津田塾大学	教授	田近裕子
		教授	野田小枝子
		教授	吉田真理子
		准教授	稲垣善律
	都留文科大学	准教授	奥脇奈津美